

日本と米国におけるオンライン教育と現状

—身近な学習者にアドバイスするために—

木下 直子

要 旨

身近な日本語学習者に「発音を勉強したいが、どうしたらいいか」とアドバイスを求められたらどうするか。本稿では、英語母語話者にアドバイジングすることを想定し、学習者の学習目標、学習リソースを選択する上で参考になる英語母語話者の発音の音声的特徴、日本と米国のオンライン教育の現状について報告することを目的としている。発音の音声的特徴については、リズム、アクセント、イントネーション、地域差の観点から述べる。また、その発音の問題を学習できるリソースとして、日本と米国のオンライン教育を紹介する。

キーワード

オンライン教育 MOOCs 音声 英語母語話者 学習アドバイジング

1. はじめに

身近な日本語学習者に「発音を勉強したいが、どうしたらいいか」とアドバイスを求められたらどうするか。自分が知っているものやかつて利用したことがある学習リソースを勧めることも多いだろう。しかし、知っているものやかつて利用したことがあるものは、本当に相談者に合ったものと言えるだろうか。日本語学習アドバイジング¹を行う際、学習アドバイザーには学習者の問題意識の背景を探り、問題点を把握した上で、最適な学習リソースにつなげることが第一段階として求められるが、本稿では英語母語話者の場合にしぼり、発音の音声的特徴、日本と米国のオンライン教育と現状について報告する。

学習目標を明確化し、実現可能な学習計画を立て、それにもとづいて学習を遂行し、ふり返って評価するという、いわゆる学習サイクルを循環させるには、日本語教育、言語教育に関する知識が必要な点がある。その一例にカリキュラムデザインの知識が挙げられるだろう。Nation & Macalister (2010) のカリキュラムデザインの枠組みでは、到達目標を考える上で、次の3点の分析が必要だとしている。冒頭の場面で解釈すると、「発音を

勉強したい」のはなぜか、何かきっかけはあったのか、将来日本語をどのように使うのかなど、将来の目標と現時点のレベルのギャップから導き出す「ニーズ」(Needs)、利用可能な学習リソース、学習者の学習スタイル、学習に使える時間、学習の場所や道具などの「学習環境」(Environment)、英語と日本語の音韻体系の違い、発音習得はどのように進むのか、発音と聞き分けの関係など、先行研究で得られた知見という意味での「原理」(Principle)の分析である。このような点を自ら問いかけ、分析した上で持続可能な学習を管理・遂行することは容易ではなく、学習アドバイザーをはじめ、周囲の支援が求められる。

本稿では、日本語学習アドバイジングを行う際に参考となるニーズ、および学習リソースについて紹介する。具体的には、Massive Open Online Courses (MOOCs) のプラットフォームであるedXのJapanese Pronunciation for Communication (JPC)で筆者が紹介した英語母語話者の発音の特徴をまとめ、日本と米国のオンライン教育の現状を報告する。

2. 英語母語話者の日本語発音の特徴

英語の母語話者の定義は難しく、バリエーションは大きい。世界で英語を公用語・国語とする国・地域は57にのぼる(二宮 2017)。McArthur (1992)では、英語の方言として、アメリカ、オーストラリア、カナダ、イギリス、アイルランド、ニュージーランド、スコットランド、南アフリカ、ウェールズを挙げている。このような多くの国・地域の人々が話す日本語の発音の特徴は、地域差、個人差が大きいことは言うまでもない。

そこで、早稲田大学の日本語教育研究センターで2016年度に日本語科目を履修した学習者2265名のうち、比較的に学習者数の多かったアメリカ(172名)、イギリス(42名)、カナダ(21名)、オーストラリア(18名)の特徴を中心に考えたい。

本章は、edXの日本語発音講座JPCの「世界の日本語教育」で筆者が紹介した英語母語話者の日本語発音の特徴について一部を加筆したものである。

2.1 リズム

言語のリズムは、ある一定の期間内にある音のまとまりが繰り返されることで感じる。世界の言語は日本語の場合、この繰り返される単位がモーラであることからモーラ拍リズム(mora-timed rhythm)と言われ、1モーラはだいたい同じぐらいの長さを保ちながら発音される(勾坂 1999)。一方、英語は、強勢拍リズム(stress-timed rhythm)で、モーラ拍を同じぐらいの長さに保って発音するのが難しい。特にモーラ数と音節数が異なる条件の場合にその傾向が見られる。

例： 故郷／3 モーラ・2 音節	根拠／3 モーラ・2 音節
公共／4 モーラ・2 音節	国境／4 モーラ・2 音節

英語の中で外来語であるラテン語は、語末から2つ目の音節が強く長くなる(窪菌 1999)。例えば、bana'na, Alaba'ma などがある。その影響が外国語である日本語にも適用されるためか、語末から2音節目が強く長くなる傾向が見られる。以下に、この影響で意味の変

化につながる例を示す。*は英語母語話者の発音を示している。

例： 時計（とけい） → 統計（とうけい）*
旅行（りょこう） → 良好（りょうこう）*

2.2 アクセント

日本語は高低アクセントと言われている。世界の言語の中にはアクセントが規則的で常に位置がわかる言語もあるが、日本語のアクセントは文字にアクセント記号が付されることはない。品詞によるアクセントパターンはあるが、名詞については予測不可能である。

音の高低に弁別機能を持たない英語を母語とする日本語学習者にとって、高さの感覚はつかみにくく、高さを強さと捉える傾向がある。「2.1 リズム」と同様、語末から2音節が強く発音され、結果的に高く長く聞こえることが多い。以下の例においてゴシック体・Hは高、明朝体・Lは低という音の高さを示している。

例： 私（わたし）LHH → 私（わたし）LHL*
天ぷら（てんぷら）LHHH → 天ぷら（てんぷら）LLHL*

2.3 イントネーション

イントネーションとは、文全体の音の高低のことを言うが、句末や文末イントネーションを指すことや、声の強弱や声質を含めることがある。発話意図に関わるため、このイントネーションが異なると、意図した気持ちが伝わりにくくなることも報告されている（国際交流基金 2009）。

日本語では疑問のイントネーションによりアクセントの下がり目の位置が変わることはないが、英語は疑問のイントネーションで全体が上昇調になる（例 1）。これが顕著なのは、co'ffee、o'bject、a'ccent など、第 1 音節に強勢アクセントが置かれる場合である（杉藤 1996 ; 31-32）。その影響で例 2 のようにアクセントの下がり目がなくなり、全体が上昇調になることがある。

例 1： cat[↑] What[↑]

例 2： 猫（ねこ）HL[↑] → 猫（ねこ）LH[↑]*
何（なに）HL[↑] → 何（なに）LH[↑]*

2.4 地域差の影響

日本語は高低アクセントで、日本国内で音の高低の変化は大きい。窪菌（2006）は、方言の多様性について次の例を挙げている。

東京 ありがとう LHLLL
名古屋 ありが[↑]とう LLHLL
大阪 ありがとう LLLHL
鹿児島 ありがとう LLLHH

一方、Cruttenden（2001 ; 221）は、'The accentual pattern of English words is fixed, in the sense that the main accent always falls on particular syllable of any given word.'

とある。Berg (1999) のようにイギリスの英語の方がアメリカの英語より前寄りの音節に強勢が置かれるという報告はあるが、高低アクセントを持つ英語の報告は管見の限りない。このことから、英語母語話者に共通して日本語の音の高低がつかみにくいと言えよう。

インド英語のように英語のバリエーションを含めて見ると、イギリス英語に比べてインド英語話者は音節拍リズム (syllable-timed rhythm) の傾向はある (Fuchs 2016)。しかし、いずれにせよモーラ拍リズムとは異なるため、地域によらず、日本語における1拍の長さのコントロールは共通して難しいと思われる。

地域差について研究した津熊 (2009) によると、イギリス英語とオーストラリア英語の特徴の違いは、長母音、二重母音、母音直前以外の r 音の脱落、母音間の t 音の有声化、文末イントネーションに見られる。これらは、Cruttenden (2001) の英語の方言の指摘と一致する。このことから、地域差の影響の大きな点は、母音の違いにあると予想される。

オーストラリアやニュージーランドの英語には /i//e/ の混同があり、‘here’ と ‘hair’ が同じような発音になるが、その影響が日本語に見られることがある。

例：名前 (なまえ) → 名前 (なまい) *
いろんな → えろんな*

発音は録音などの方法をとらない限り、一瞬で音が消えてしまうため、自分の発音を繰り返すことは容易でない。また、自分の発音を聞いても日本語の音韻知識がなければ、注意すべきポイントがわからず、音に対する意識化、言語化が難しい。そのため、学習者自身が以上のような学習目標を挙げにくいと思われる。戸田 (2004) には「英語母語話者のための発音レッスン」で具体的な練習方法が紹介されており、参考になる。このほか、オンラインの学習リソースについて次章で紹介する。

3. 日本と米国におけるオンライン教育

第2章は、edX のコースで紹介した内容をまとめたものであるが、オンライン教育の学習リソースを報告する前に、オンライン教育のこれまでの背景についてふれておきたい。

edX は、アメリカを中心とした大学のコンソーシアムにより無償で講座を提供するグローバル MOOCs の代表的なプラットフォームの一つである。日本語では「大規模公開オンライン講座」と訳される。重田 (2014) によると、MOOCs は、2008 年にアメリカとカナダの大学教員がインターネット上に学習コミュニティを作り、教員以外に学生、一般人もそのコミュニティに参加して学び、その効果を実感したことから始まったという。この表現からも、一部であれ、教員や学生、一般人が指導する立場、教わる立場を超えて、ともに学び合える対等性が実現できていたことがうかがえる。

また、アメリカには学習者が自律学習を養う土壌があったことについても述べておきたい。この MOOCs が誕生するまでにアメリカではより多くの人に学習の機会を提供するための公開教育 (Open Education) が注目を集めてきていた。このことは、「自分のおかれた環境で、利用できるものは何でも使って学ぶ」(梅田・飯吉 2010) という流れを作ったと考えられる。その流れの中でマサチューセッツ工科大学では 2007 年には開講している

すべてのコースを一般に開かれた公開教育資源（Open Education Resources）として提供するため、2001 年から取り組んできた。これが、MIT Open Course Ware である。

このような公開教育の提供元は、大学だけでなく、民間企業からの発信もある。例えば、Khan Academy は、カーン氏が自分の親戚に数学を教えるための動画をインターネット上にアップしたところ、わかりやすいことが評判になり、多くの利用者が生まれたことから始まっている。このことは、梅田・飯吉（2010）のいう、教師の役割が単に「知識を伝える人」から「自由な学びと成長をサポートする人」へと認識が変わり、だれもが学ぶ者、教える者になるという意識を育んできた事例と言えるだろう。

MOOCs は公開教育資源としてコンテンツを提供するだけでなく、学習の質の改善、持続可能な学習に対する配慮がなされ、学習コミュニティを確保して相互に学び合うという環境を整え、コース修了者には認定証を発行するなどの工夫をしている。

日本においても 2013 年 10 月に JMOOC（日本オープンオンライン教育推進協議会）が発足し、「gacco（ガッコ）」が開かれた。

では、第 2 章のような学習目標を持つ学習者にどのようなオンライン教育が紹介できるだろうか。次節より具体的な日米オンライン教育の現状について音声教育を中心に検討する。

3.1 米国のオンライン教育

表 1 は米国における主要なオンライン教育について、名称、URL、全コース数、言語系コース数、日本語教育関連コース数をまとめたものである。

表 1 米国における主要なオンライン教育 (2017 年 4 月 18 日時点)

名称	URL	全コース数	言語系 コース数	日本語教育 関連コース数
①MIT OpenCourseWare	https://ocw.mit.edu/index.htm	2,340	112	10
②Khan Academy	https://www.khanacademy.org/	4,000	11	0
③edX	https://www.edx.org/	1,487	54	1
④Coursera	https://www.coursera.org/	2,000 以上	108	0
⑤Udacity	https://www.udacity.com/	179	0	0
⑥Udemy	https://www.udemy.com/	37,458	944	41

米国の主要なオンライン教育には、公開教育資源としての①MIT Open Course Ware、②Khan Academy、世界規模のグローバル MOOCs である③edX、④Coursera、民間企業など各地域で展開されているローカル MOOCs として⑤Udacity²、⑥Udemy がある（表 1）。

日本語教育関連コース数は⑥Udemy が最も多く、41 コースある。そのコース内容をカテゴリー別に見ると、多い順に、総合日本語 15、文字（ひらがな・カタカナ）5、JLPT⁵、

会話 4、漢字 3、ビジネス 2、観光日本語 2、文化 2、発音 1、歌 1、であった。

Udemy が提供する発音のコースは、‘Beginner’s Guide to Japanese Pronunciation ... and More!’ (有料) である。紹介されているコースのシラバスは次の通りである。

-Introduction

-Syllables of Japanese

- 1) Familiar Japanese Words、2) Characteristics of Japanese Syllables、3) Japanese Pitch Accent、4) Review of Japanese Syllables、5) Section 2 Summary

-Pronouncing Japanese Sounds

- 1) Basic Japanese Sounds、2) Additional Sounds、3) Review of Japanese Sounds、4) Section 3 Summary 5) Listening Quiz on Identifying Japanese Sounds 1 6) Listening Quiz on Identifying Japanese Sounds 2

-Ordering Food in Japanese

- 1) Ordering Food in Japanese、2) Model Dialogue、3) Review of Ordering Food、4) Section 4 Summary、5) Quiz on Ordering Food 1: Multiple Choice、6) Quiz on Ordering Food 2: Writing Words、7) Bonus Lecture: Most Practical Tip for Ordering in Japan

-Tips to Improve Your Japanese Pronunciation

以上のシラバスから、日本語の単音、音節、高低アクセントが扱われていることがわかる。動画では、スライド資料が示され、英語の説明が流れる。扱う音声項目は単語レベルで、会話につなげたり、発音練習を促したりするタスクはない。知識を伝え、クイズで聞き分ける形式である。

③edX の日本語教育関連コースは、現在 JPC の 1 コースのみである。JPC で紹介されているコースのシラバスは、次の通りである。

第0回 講義概要

第1回 発音のポイント

- 1) 特殊拍・日本語のリズム 2) 高低アクセント 3) 表現意図とイントネーション
4) 意味のまとまり 5) 人間関係や話の内容、場に応じた発音

第2回 アクセント

- 1) 名詞のアクセント 2) 複合語のアクセント 3) 人名のアクセント

第3回 イントネーション

- 1) 〜じゃない 2) 〜でしょう 3) 〜でしょうか 4) そうですね 5) そうですか
6) への字型イントネーション

第4回 話しことばの発音

- 1) 拗音化 2) 「い」の脱落 3) 母音の融合 4) 撥音化 (長音化・促音化)

第5回 「発音の達人」になろう

動画では、スライド資料とともに、講師が内容を説明する。動画の内容は、字幕を 4 言語 (日本語、英語、中国語、韓国語) から選択でき、7 言語 (日本語、英語、中国語、韓国語、ベトナム語、インドネシア語、タイ語) の音声翻訳ファイルが利用できる。この項目とは別に会話教材があり、会話に現れる音声的な特徴に関する説明がある。また、1 分

前後の短いシャドーイング練習用の音声教材が各回に3ファイルずつ準備されている。

このほかのオンライン教育、②Khan Academy、④Coursera、⑤Udacity に日本語教育関連コースはない。

3.2 日本のオンライン教育

表2は日本における主要なオンライン教育について、名称、URL、全コース数、言語系コース数、日本語教育関連コース数をまとめたものである。

表2 日本における主要なオンライン教育 (2017年4月18日時点)

名称	URL	全コース数	言語系 コース数	日本語教育関 連コース数
⑦gacco	http://gacco.org/	144	2	1
⑧OUJ-MOOC	https://dev.chilos.jp/	8	2	2
⑨Open Learning, Japan	https://open.netlearning.co.jp/	28	0	0
⑩Fisdом	https://www.fisdом.org/	9 (13)	0	0

JMOOC 公認のプラットフォームには、⑦gacco (ドコモ gacco 社)、⑧OUJ-MOOC (放送大学)、⑨Open Learning Japan (ネットラーニング社)、⑩Fisdом (富士通株式会社)がある(表2)。⑩Fisdомは、13コースあるが、開講中のコースは9コースである。

日本語教育関連コース数は、⑦gacco では、「『そうだったのか』の日本語教育学」の1コース、⑧OUJ-MOOC(放送大学)では、「Nihongo Starter A1 -Class8-」「Nihongo Starter the CLASS7」の2コースを提供している。日本語学習者向けの「Nihongo Starter」のシラバスについては、篠原・築島(2015)が詳しいが、これによると、動画の音声はダウンロードが可能だが、音声を扱った説明、練習は設けられていない。

3.3 オンライン音声学習サイト・学習ツール

さいごに、音声に特化した学習サイトおよび学習ツールについてふれておきたい。

3.3.1 つたえる はつおん

「つたえる はつおん」(<http://www.japanese-pronunciation.com>)は、早稲田大学日本語教育研究センターの研究プロジェクトで開発した音声の自律学習支援サイトである(木下ほか2017)。扱っている音声項目は、単音(つ、ざ行音、な行音・ら行音)、有声音・無声音、リズム、アクセント、イントネーションで、コンテンツは「チェックテスト」「聞き分け練習」「解説」「学習方法を紹介する動画」から成る。

学習方法を紹介する動画として、次の21の動画を公開している(2017年11月現在)。
〈リズム〉

1) 知っている単語で拍の練習をしようーリズムのパターンを考えながら発音する練習ー

- 2) メトロノームを使ってリズムの練習をしようー特殊拍を含む単語の発音練習ー
- 3) ビート音でリズム練習をしよう
- 4) 自分のリズムを確認しようー音声分析 Praat を使った練習ー
- 5) 身体を動かしてリズムを確認してリズムをつかもう
〈アクセント〉
- 6) 自分のアクセントを確認しようー音声分析ソフト Praat を使った練習ー
- 7) 単語のアクセントを調べてみようーOJAD 単語検索ー
- 8) 動詞のアクセントのルールを知ろう
〈イントネーション〉
- 9) 聞きやすくてわかりやすい発音をしようースラッシュリーディング
- 10) 自分の作文のモデル発音を聞いて練習しようーOJAD スズキクンを使った練習ー
- 11) 自分の気持ちを伝えようー「そうですか」ー
- 12) 自分の気持ちを伝えようー「いいですよ」ー
- 13) 自分の気持ちを伝えようー「きれいじゃない」ー
- 14) シャドーイングでなめらかに発音しよう
〈子音〉
- 15) 「ざ行」の発音を身につけよう
- 16) 「つ」の発音を身につけよう
- 17) 身体の動きを使って練習しようー「か・が」「た・だ」の練習ー
- 18) 「な行音」と「ら行音」を区別して発音しよう
〈気持ち〉
- 19) 強調のしかたを覚えよう
- 20) 丁寧な気持ちの表し方を知ろう
- 21) あいづちを練習しよう

Kinoshita (2015) では、学習者によって発音の感覚をつかみやすい方法が異なっていることを報告しているが、この「つたえるはつおん」では自分に合った方法を見つけ、持続的な学習につなげてもらいたいというねらいがある。

3.3.2 Praat

Boersma 氏・Weenink 氏が開発したフリーの音声分析ソフト Praat (<http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>) で、edX の JPC の中では自分の発音したアクセントの高さを確認する方法として紹介している。音声の研究で広く用いるソフトであるが、無料であること、高さや長さのすぐ確認できる点で学習者からの評判がよい。

3.3.3 OJAD

Online Japanese Accent Dictionary (OJAD ; <http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/>) は、東京大学の峯松氏、廣瀬氏により開発されたサイトである。単語のアクセントを検索し、発音を聞くことができる。特に「韻律読み上げチュータスズキクン」は、学習者自身が作成した文章の韻律情報（アクセント、イントネーション）を確認し、そのモデル音声聞くことができる点で学習者からの人気が高い。OJAD を活用した学習方法についても「3.3.1 つたえるはつおん」で動画を紹介している。

3.3.4 AI Talk

AI Talk (<http://www.ai-j.jp/>) は、エーアイが開発した音声合成のサイトである。音声合成デモンストレーションで日本語、英語、中国語の文章を入力し、19 人の声でそのモデル音声を聞くことが可能である。速度、ピッチ、抑揚に加え、4 人の声では怒り、悲しみ、喜びの感情を調整し、モデル音声を聞くことができる。合成音声で感情を扱っているという点で類を見ない。

4. まとめと今後の課題

身近な英語を母語とする日本語学習者に「発音を勉強したいが、どうしたらいいか」とアドバイスを求められたらどうするか。このような学習者の発音の問題を掘り下げて考えていく上で参考となる英語母語話者の発音の特徴として、1) 語末から 2 音節目の音が強くなり、結果的に長く高く聞こえること、2) 音の高さの感覚がつかみにくいこと、3) 疑問のイントネーションの際に単語のアクセント核が崩れる場合があること、4) 英語の地域差として母音の影響が考えられること、を取り上げた。

仮にこれらの学習を目標とする場合、どのような学習リソースにつなげられるか。その点を考えるべく、日本と米国のオンライン教育の現状を調べたが、音声で学習できるオンライン教材は、米国のグローバル MOOCs で 1 コース、ローカル MOOCs で 1 コースあったが、日本の JMOOC では確認できなかった。コースの選択肢がまだ限られた状態であるが、今後、なぜオンライン教育なのか、日本語教育の分野の中でもどのような学習にオンライン教育が適しているのかについてデータを蓄積していく必要があるだろう。

学習成功者に対するインタビュー結果から、発音の習得度には、大量のインプットや音韻知識、自分に合った方法での継続的な学習が関わっていることが明らかになっている(戸田 2008)。このような点で、音声学習をする際に、オンラインの学習リソースが貢献できることは多いと考える。その一方で、オンライン特有の ICT 活用スキルが求められるというハードルの高さは否めない。梅田・飯吉(2010: 82) は、「ウェブ上に溢れるオープンな教材や教育ツールを独力で使いこなすのは、実はそう容易なことではありません。なぜなら、どんなに多くの教材や教育ツールが無料で公開されていても、それらを効果的に使いこなすための『実践的知識(俗にいう「ノウハウ」)』が乏しいからです。」と述べている。この点は、今後、どのような「実践的知識」が必要であるのかを見極めていくとともに、オンライン教育が適したところは対面の授業に積極的に取り入れていくなど、学習経験を積み、達成感が感じられる仕組みづくりが期待される。

注

- 1 日本語学習アドバイジングについて黒田(2016)は次のように定義している。「日本語学習者一人ひとりが自分に相応しい目標を見定め、最適ナリソースを選択し、具体的な学習計画を策定した上で着実に学習を推し進めながら、定期的に振り返って効果的に次のより良い学習に発展させていくことが望ましい。そしてその期待される学びを実現するための個別的な学習支援が、日本語学習アドバイジングである。」

- 2 Udacity は、元スタンフォード大学教授が立ち上げたプラットフォーム。コンピュータサイエンスや数学に特化したコースが中心である。

参考文献

- 梅田望夫・飯吉透 (2010) 『ウェブで学ぶーオープンエデュケーションと知の革命』筑摩書房
- 窪菌晴夫 (1999) 『日本語の音声』岩波書店
- 窪菌晴夫 (2006) 『アクセントの法則』岩波書店
- 木下直子・田川恭識・角南北斗・山中都 (2017) 「自律学習を促進させるためのシステムづくりーWeb教材「つたえるはつおん」の開発ー」『早稲田日本語教育実践研究』5、pp. 141-150
- 国際交流基金 (2009) 『音声を教える』ひつじ書房
- 黒田史彦 (2016) 「日本語学習アドバイジングの挑戦」アカデミック・コーチング学会第1回年次大会資料集『コーチングー教育現場での実践ー』pp. 19-24
- 匂坂芳典 (1999) 「日本語音韻の時間長制御と知覚」『言語』大修館書店、pp. 28-29
- 重田勝介 (2014) 『オープンエデュケーションー知の開放は大学教育に何をもたらすか』東京電機大学出版局
- 篠原亜紀・築島史恵 (2015) 「オンライン日本語講座「NIHONGO Starter」ー電子書籍型教材の開発と運用ー」『国際交流基金日本語教育紀要』第11号、pp. 53-66
- 杉藤美代子 (1996) 『日本人の英語』和泉書院
- 津熊良政 (2009) 「オーストラリア英語アクセント：豪英語特徴についての一考察」『立命館言語文化研究』20(4)、pp. 107-138
- 戸田貴子 (2004) 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク
- 戸田貴子 (2008) 『日本語教育と音声』くろしお出版
- 二宮健二 (2017) 『データブック・オブ・ザ・ワールド2017年版ー世界各国要覧と最新統計ー』二宮書店
- Berg, T. (1999) Stress variation in British and American English, *World Englishes*, 18(2), pp. 123-143
- Cruttenden, A. (2001) *Gimson's Pronunciation of English*, 6th edition. London: Edward Arnold.
- Fuchs, R. (2016) *Speech Rhythm in Varieties of English: Evidence from Educated Indian English and British English*. Singapore: Springer.
- Kinoshita, N. (2015) Learner preferences and the learning of Japanese rhythm, *Proceedings of the 6th Pronunciation in Second Language Learning and Teaching Conference*, pp. 51-62
- Macarthur, T. (1992) *The Oxford Companion to the English Language*, Oxford & New York: Oxford University Press.
- Nation, I. S. P., Macalister, J. (2010) *Language Curriculum Design*, New York & London: Routledge.

(きのした なおこ 早稲田大学日本語教育研究センター)